

どんぐり

No.52



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

(Nature Education Center)

九九のお山で遊ぼう



兵庫県立南但馬自然学校

校長 森本 雅樹

● 自然に学ぶ

県下の小学生を学校ぐるみで5泊6日連れて行く自然学校は大きな成果を上げ、実施20年を超えました。毎日の教室での勉強では得られないものを子どもたちに与えているからでしょう。語呂合わせみたいですが、自然学校に学ぶはいかがでしょう？自然学校を真似した授業をやってみようではありませんか。

● 九九のお山で観察ビンゴ

先生にも子どもにも人気の自然観察ビンゴです。森の中に子どもたちを放し、何か気付いたことを報告し合うのです。見つけた鳥や花は、それぞれに自然とのかかわりを教えてくれます。これを掛け算の九九でやってみましょう。子どもたちに九九の表を渡し、何か気付いたことを報告してもらいましょう。

いちばん簡単に気付くのは「右上半

分と左下半分が同じ」あたりでしょう。すぐに手が上がり、「 4×7 と 7×4 が同じ」なんて答が出ますね。「九九の段がおもしろい」に対しては中々手が上がりません。チョッと難しそうです。おじさんがやった実験授業では、立ち会っていたいた先生が「さっきのは数というものの性質、今度は十進法の性質ですね」とむずかしく答えてくれました。



● 数の世界は大きな自然

九九の授業といえど節をつけて暗唱、計算問題、応用問題で終わりで

す。あとは正答率とか履修率とかの評価くらいでしょうか。自然学校流は掛け算と数というものの関連を教えるようにしています。

子どもたちはさらにいろんなものを拾ってきます。「チンパンジーのアイちゃんは掛け算するかなあ？」「縄文時代に掛け算あったかなあ？」

数の世界は大きな自然です。

そこで一桁の掛け算は小さなお山、九九の表はそこを基盤にした正確な地図です。子どもたちは地図の上の正確な歩き方を覚えます。ビンゴ流では数と数、数と知、数と人間社会などを関連付けて回ります。数の作る広い世界に触れるのでしょうか。

● 自然学校流

自然学校に学ぶ、で九九という題材は極端な例のように思えるかもしれませんが。しかし、極端なだけに、一つの典型ともいえるでしょう。暗唱とドリル、それは知識と技術です。自然学校流はそのどちらでもないものに頭が向く習慣に道を開いています。それって、自然学校だけでなく、教室での勉強にもとても大事なものの、しかも受験、テスト、揺らぐ学力観、など今の教育が揺れている局面で特に大事なものでないでしょうか。

● どっちが正しい、でなく

自然学校流には正しい、間違い、はあんまり先鋭ではないでしょう。授業には取り入れにくいかもしれませんが、でも、取り入れにくい、は失ったもの、と言えるかも知れませんね。

おじさんがいつもお会いしている生方、突飛な話題、かけ離れた議論かもしれません。どっちが正しいか、ではなく、耳を貸していただけたら幸いです。

表紙の写真

南但馬自然学校（朝来山）に棲む

ニホンアナグマです。

森林に生息する、地上性の動物です。夜行性で、昼間は地面に掘った穴の中で休んでいます。夜になると巣穴を出て単独で餌を探し、ミミズや昆虫、ネズミ、トカゲ、さらには果実やキノコなど非常に雑多なものを食べます。



自然学校実施20年に思う



県立南但馬自然学校

主任指導主事兼指導課長

東 智之

兵庫県が取り組んでいる自然学校は、実施から20年が経過した。この間、一年間に5万人以上の小学校5年生が自然学校を経験している。この20年間の延べ人数で言うと、県民の約2割が経験したことになる。

当然、20年の間には、色々な節目があり、その都度、実施の成果や効果、問題点等について検証がなされてきた。これだけ、長期間にわたり、事業を継続すれば、当然のことながら、マンネリ化等様々な問題点が出てくるし、事業実施の背景等も記憶の片隅に思いやられてしまう。

そこで、自然学校の原点、実施の背景等を振り返ってみよう。

昭和58年にファミリコンコンピュータ（以下、ファミコンという）が登場し、パソコンやワープロが急速に普及していった。「ドラゴンクエスト」（ドラクエ）などの人気ソフトが昭和61年に発売され、子どもたちはこぞってファミ

コンに熱中した時代であった。

情報伝達のスピード化や情報の共有化といった光の部分だけではなく、疑似体験の増加や人間関係の希薄化など影の部分が危惧されていた時代であった。

そのような中、昭和59年には、国の補助事業として3泊4日の自然教室が始められた。この事業は、各都道府県ごとに数校を指定するという形の事業であった。

兵庫県では、この自然教室の補助に県費を補填し、昭和63年から、県下全公立小学校5年生を対象とした5泊6日の自然学校を開始した。県下全ての小学校を対象とした事業展開は、当時も大変、大胆な取組として評価されていた。

図1の自然学校推進事業の流れを見てもらうと、昭和63年の事業開始から、様々な課題解決のための手立てが考えられ、平成3年によく、全校実施

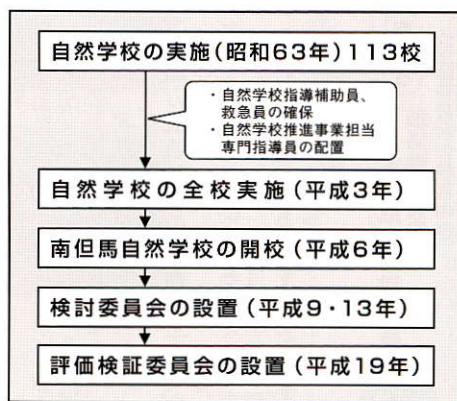


図1 自然学校推進事業の流れ

ができています。現在では、当然のことのように各学校で依頼している自然学校指導補助員や救急員の確保、自然学校専門指導員等の配置など事業推進のための手立てが講じられた。

また、図2には、自然学校実施のねらいをまとめた。根底にあるのは、「生きる力」の育成である。

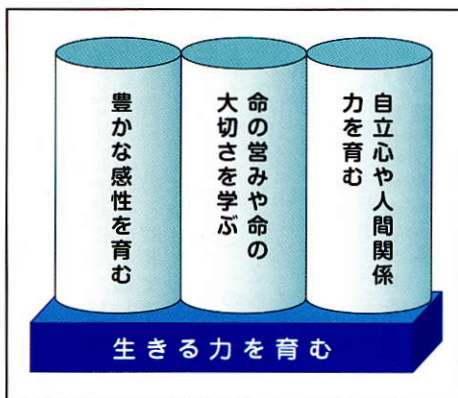


図2 自然学校実施の目的

各学校で自然学校のねらいを設定する場合には、是非、図2の自然学校実施の目的を念頭に置いていただきたい。

平成20年度には、学習指導要領が改訂され、自然の中での集団宿泊活動など学校種ごとの重点的な体験活動を一層充実させることが求められている。

兵庫県の場合、小学校の環境体験事業や自然学校、中学校の「トライやる・ウィーク」など、既にこの改訂で求められている活動を実施している。

本校でも昨年度から近隣の府県の視察が増えてきた。兵庫県で実施している自然学校と同様の事業を実施予定の自治体が増えてきているようである。自然体験活動や社会体験活動では、兵庫県は、全国のトップランナーと言っても過言ではない。

自然学校を実施してから20年が経過した今だからこそ、事業実施の背景や初期の目的を忘れないでいただきたい。

この自然学校の「不易」の部分と刻々と変化する子どもたちや社会の状況にあわせた「流行」の部分をうまく重ね合わせ、益々、自然学校が充実することを期待したい。

自然学校実施20年の 評価検証と今後の推進方策

兵庫県教育委員会義務教育課

昨年度に事業実施20年目を迎えた自然学校推進事業は、「心の教育」の充実をめざして、子どもたちの「生きる力」を育む体験活動の場として、様々な教育的な効果をあげながらその歩みを続けている。

子どもを取り巻く環境の大きな変化や、新学習指導要領の改訂において体験活動が一層重視される状況の中、本県では事業実施20年目を機に、「自然学校評価検証委員会」を設置し、そこで得た貴重な提言を基に、今後の自然学校を推進する「テーマ」と「充実に向けた6つの推進方策」を設定した。

テーマ

自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ

〔6つの方策〕

方策1 自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実

(検証委員会の提言内容)

①教育課程上の位置付けの明確化

自然学校は、特別活動の学校行事を基本とし、ねらいに応じて総合的な学習の時間や道徳との関連を図るなど、教育課程への位置付けを明確にし実施することが大切である。また、5泊6日の体験活動として完結するのではなく、自然学校と事前・事後の学習や集団活動などとの関連を図るなど各学校の創意ある取組が大切である。

②自然学校での学びを普段の教育活動に生かす工夫

体験を通じた多様で実感を伴った

学び方を普段の授業や教育活動に取り入れることが大切である。

③日常につながる非日常体験の充実

非日常の体験を通して、自然等との感動的な出会いや新たな気づきなど、自然学校での豊かな学びが他の教育活動や生活に生きることによって価値がある。

方策2 事前・事後の学習活動の一層の充実

(検証委員会の提言内容)

①子どもたちにとっての自然学校の目標の明確化

例えば、事前に食生活について学習を行い、自然学校では、地元で採れた米と野菜で野外炊事に取組み、事後では、自然学校の経験を生かして食生活を見直す学習等、一定のテーマ性ある自然学校の実施が大切である。

②事前・自然学校・事後を通じた言語活動の充実

体験したことをレポートにまとめ表す等、事前・自然学校・事後のそれぞれの段階に応じた学習や活動に係る言語活動が大切である。

③子どもの自己・相互評価の重視

個人として気付いたり感じたりしたことをクラスや学年全体で伝え合う等、自然学校での豊かな体験が広い認識につながるよう工夫することが大切である。

方策3 学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実

(検証委員会の提言内容)

①子どもたちの心と体の解放

子どもたちが心と体を自由に活動できる環境が大切であり、その活動を通して、必要な能力や社会性を育むことが大切である。

②地域の特性を生かし、学校教育では得難い教育効果を想定したねらいの設定

地域の特性を生かした活動や通常の学校教育では得難い活動等を重視し、多様な観点からねらいを設定す

ることが大切である。

③自然の本質にふれたり、達成感を味わうプログラムの設定

朝日や夕日を見る等、自然界の根源的なことへの出会いを通して、日常で考えていたものとは異なった自然観に気付くような体験も大切である。

④教師のプログラム開発力の向上

魅力あるプログラムの開発とともに、子どもに目線に立ち、状況や環境に応じて柔軟にプログラムを実施する等、教師の専門性を高める研修の場が大切である。

方策4 社会性や自立性等を育むための集団活動の充実

(検証委員会の提言内容)

①社会性を育むプログラムの開発・設定

自然学校が集団活動を通して、社会性や規範意識を育む場となるよう、集団活動の視点からプログラムを設定することが大切である。

②ところを通い合わせ支え合う活動の設定

失敗しながら仲間と一緒にチャレンジする経験を通して、集団への連帯意識を高め、人間関係づくりや社会的自立への契機となる活動を工夫することが大切である。

③集団活動・生活を通して育む実践的な態度

例えば、自然学校での生活上のルールを子どもたちが自身が作り、実践し、必要に応じて修正するなど、自主的、実践的な態度を育む好機とすることも大切である。

④長期の宿泊体験の意義を生かした活動の重視

ホームシックを乗り越える等自立心を育むとともに、自然学校が集団への所属感や連帯感を深めつつ、仲間との大切さを実感する機会とするものが大切である。

方策5 子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実

(検証委員会の提言内容)

①生命を尊重する心を育む自然学校

低学年での学習や体験を踏まえ、自然学校では、命の尊さを発展的に学ぶための指導の工夫が大切である。

②子どもの成長過程をふまえた体験活動の系統的な実施

3年生の環境体験事業では、自然にじっくりとふれ、感じることをねらいとし、自然学校では、この経験を生かして自然の多様性に気付くといった系統性が考えられる。

方策6 家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

(検証委員会の提言内容)

①家庭と連携し、家庭の教育力を高める工夫

説明会を工夫するとともに、個々の子どもの状況を十分に把握するための保護者とのコミュニケーションを十分に図ることが大切である。また、自然学校の成果について保護者と共通理解を図るとともに、自然学校を契機に子どもの社会的な自立等に向けた家庭の教育力を高めることも大切である。

②ボランティアの参画を得た取組

ボランティアの導入にあたっては、目的及び教師の役割を明確に実施することが大切である。

③教育委員会や関係機関と十分な連携を図る取組

体験活動の充実や健康・安全面の確保、特別な支援を要する児童の活動を支援する観点から教育委員会の指導・支援や医療機関など、関係機関との連携を図る取組が大切である。

県では、今年度、これらの「充実に向けた6つの推進方策」を観点とした実践事例集を作成する予定である。各学校においては、本稿で示した推進方策等を参考に、自然学校の一層の充実に向け、創意工夫した特色ある自然学校を推進することが期待される。

平成20年度の自然学校 はじまる

県立南但馬自然学校 主任指導主事 鈴木 文孝

今年度の南但馬自然学校での自然学校が、ゴールデンウィークまつただ中の5月5日(月)からはじまりました。12月6日(土)までの8か月間に、65校(利用延べ人数約28,400人)がここ南但馬自然学校で様々な活動を展開します。

ここでは、すでに5月・6月に取組を終えた特色ある自然学校の活動を紹介します。

1 明石市立中崎小学校

(児童数/48名)

(実施期間/5月5日~10日)



さあ出発! 雲海は見れるかな...



やった! 雲海が見れた!

2日目に実施した「早朝登山」では、この時期には珍しい雲海も見ることができました。昨年も早朝登山を実施し(9月)雲海を見事見るこ

2 明石市立谷八木小学校

(児童数/81名)

(実施期間/5月26日~31日)



うまくできるかな...



学級目標の完成 (一部)

3クラス81名で入校。木工クラフトでは、各学級ごとに年間を通して教室に掲示するための学級目標のパネルを全員が交代をしながら力を合わせて制作しました。帰校後、教室前面に掲げられた学級目標を見上げるたびに、全員で協力しがんばった自然学校のことが鮮明によりみかえるに違いありません。自然学校を事後

の教育の中に生かす工夫がなされていきました。

3 小野市立市場小学校

(児童数/74名)

(実施期間/6月2日~7日)



シイタケ栽培の手伝い



あまいイチゴみつけた!

食に関する学習をテーマに、火熾し器具作成・竹細工による食器作りにはじまり、県立コウノトリの郷公園近くの農家に、コウノトリ育むお米作りのお話を聞いた後、地元のイチゴ栽培農家でイチゴの採り入れをしたり、こんにやく作りに挑戦したりと、8班が但馬各地の農家等を訪問し地元とのふれあいを重視した活動を展開しました。はつきりとした目標の下、ねらいに沿った活動を展開されていました。

様々な工夫を凝らしたプログラムが、南但馬自然学校で展開されています。次回の「どんぐり」でも特色ある取組を紹介します。

里山クラブの活動

里山クラブ「どんぐり」は、朝来山の一角である県立南但馬自然学校の敷地をフィールドにして、自然学校を利用する児童・生徒や県民が親しめる里山づくりを目指し、活動しているボランティアグループです。

間伐や下草刈りなどの森林の整備を行いながら、里山を散策し、草花や野鳥などを愛でる会、春にはタラの芽やコシアブラなどの山菜、秋にはアケビなどの木の実やキノコを食す会など、会員のみんなで知恵を出し合って色々なことを企画し、活動しています。

また、毎年3月には、「朝来山里山づくりイベント」を開催し、広く県民の方に参加していただき、実のなる木の植樹や、どんぐりの種まき、きのこの菌の植え付けなども行っています。

里山クラブ「どんぐり」では、多くの方に里山づくりを楽しんでもらうために、会員を募集しています。このような活動に興味のある方、参加してみたい方は、里山クラブ「どんぐり」事務局(兵庫県立南但馬自然学校内担当:吉本 Tel:079-676-4730)までご連絡ください。



医務室の

窓から

兵庫県立南但馬自然学校

主任指導主事 増田 千代子

自然学校と心の健康

自然学校に参加するほとんどの子どもたちは、5泊6日親元から離れて生活するのは初めての経験です。上級生や兄弟から自然学校の楽しさを伝え聞き、とても楽しみにしている反面、やはり不安やストレスはとても大きなものです。

さらに、日頃一緒に学級で生活しているとはいえ、一日中集団で生活することの気疲れもかなり強くなると思います。普段元気に学校へ通っている子どもでも、不安から夜ホームシックになることもあります。持病を持っている子どもや、体の不自由な子どもの不安は、さらに大きくなるのが予想されます。

強い緊張や不安を感じていたり、心配なことがある場合、様々な症状が心身に表れることがあります。頭痛や腹痛などの身体の症状の場合と、元気がない、ぼんやりしている、食欲がないなどの行動の変化として見られる場合があります。心の面から表れているものか見分けることはとても難しいものですが、身体に明らかな症状がないと

判断される場合には、早い時期から心のケアをすることとともに、予防的な配慮も必要となってきます。

そして、何よりも子どもたちに安心して自然学校に臨む気持ちを持たせることが重要です。保護者が必要以上に心配すると、子どもは同じ様に心配して不安になってしまいます。こんな時はどうしたらよいのかという不安には、一緒に考えて具体的に丁寧に答えたり、アドバイスをしてあげましょう。

自然学校では、山となる3日目を過ぎるまではホームシックや泣きじやくりから過呼吸などを起こす例があります。一人の子どもが起こすと、連鎖反応のように他の子ども同様の症状を起すこともありますので、細やかな配慮が必要となってきます。特に夜間に起こすことが多いので、職員の見回りをこまめに行い、子どもたちの小さな変化も見逃さないようにすることが大切です。

身体症状を訴えている子どもがいた場合、痛いところをさすってあげたり、スキンシップを図りながら「どこが痛いのか?」「何か悲しいことがあったのか?」など言葉をかけることが大切です。

そして、本人の気持ちを理解し、どうしたらよいかを一緒に考えていくことで、自分の気持ちを振り返ることができます。このような時に、強い励ましはかえってマイナスとなることが多いので、注意が必要です。このようなことは特定の子どもに起こる訳ではなく、誰にでも起こることなので、指導者は連携を取りながら小さな変化も逃さず、早期の対応を行うことが大切です。

また、不登校気味の子どもたちにとつては、他の子どもたちよりさらに不安は大きなものになりますので、より具体的な配慮が必要となってきます。精神的に不安定な子どもたちは、つらくなってきたり指導者に自分で行うことができにくいので、このような時に先生に伝えるサイン(帽子をさわる、瞬きを何回もする等)を子どもと決めておくことも有効です。そのサインがあることで、先生がいつでも自分を見守ってくれているという安心感を感じることができるようになります。

しかし、このような子どもたちも含め、6日間元気に自然学校をやり遂げるためには、友だちとの良い関係が何よりも重要なポイントです。

ある学校でA君がホームシックと思われる症状で体調を崩し、食欲がほとんどないため、一時帰宅することになりました。もしも、このまま、再来校することができなければ、友だちとの共有体験を得ることがないまま、自然

学校を終えてしまいます。そんな思いから、班の子どもたちにお見舞いをお願いしたところ、4人の子どもたちが見送りを兼ねて、医務室に来てくれました。

そして、一言づつA君に励ましの言葉を伝えていたところ、最後に残ったB君が急に泣きだしました。そして、「A君が帰ったら僕はとても寂しいけど頑張るから、金曜日は一緒にキャンプファイヤーしようね」と言ってくれたとたん、A君の表情はみるみる変わり、心の変化を感じとることができました。

2日後、ホームシックで泣いていた時とは別人のように明るい表情のA君が再来校しました。そして、駆けるように友だちのところへ行き、その後、元気に活動に参加しているA君の姿を見ることが出来ました。

精神的なことが原因と思われる体調不良の場合、一時帰宅するかどうかはとても判断が難しいと思われます。A君の場合、「こんなにも自分を待っていてくれる友だちがいるんだ」という想いを強く感じることで、不安を一掃することができ、かけがえのない思い出となる自然学校となったと思います。



こけ玉を作ろう

簡単こけ玉作りに挑戦

材 料	ケト土、赤玉土、緩行性肥料、好きな植物、こけ（ハイゴケやヤマゴ等）
道 具	バット（洗面器等の器）、水、糸、はさみ、ゼムクリップを半分に切った物

1 土（下地）を混ぜる



ケト土と赤玉土を7:3の割合で合わせ、緩行（かんこう）性肥料を少し入れ、水を加えながらよく混ぜ、団子状にします。

2 団子に好きな植物を植える

植物の根の土を落とし、根を団子で包み込みます。



3 こけを巻く



団子をこけで包み込むように巻きます。団子が見えないくらいにこけで包み込みます。

4 糸を巻く

太めの木綿糸で、こけがはずれないようにぐるぐる巻きます。最後は、ゼムクリップを半分に切ったU字型の金具をつけて差し込んで固定します。



5 こけ玉を水につけ、飾ります



糸を巻いたこけ玉を、約5分間水につけて水をしみこませ、その後しっかりと水を切って飾ります。

身の回りにある植物を使って、こけ玉を作ってみましょう。しっかり世話をすると、何年もお部屋を飾ることができますよ。

南但馬自然学校
歳時記

その日ばかりの命

兵庫県立南但馬自然学校

技師 増田 克也



現在、南但馬自然学校では7種類のヘビの生息を確認しています。その中で、出会う機会が少なく他のものとは一風違った「ヒバカリ」というヘビをご紹介します。

ヒバカリは兵庫県レッドデータブックで「要注意目種（最近減少の著しい種、優れた自然環境の指標となる種などの貴重種に準ずる種）」に指定されています。本校でも1シーズンに1、2回程度しか見

られています。本校でも1シーズンに1、2回程度しか見

られない大変珍しいヘビです。体長は大きな成蛇で60cmほどになるようですが、こ

れまで出会ったものはミミズ程度の幼蛇がほとんどでした。しかし、右の写真の個体は40cmを越える立派なヒバカリでした。

身体の色は暗い褐色で、模様にもこれといった特徴はありませんが、えりもとの黄色味がかかったラインが他のヘビとの識別ポイントになります。



研修会のお知らせ

自然学校講座

- 指導補助員養成コース
- 指導者スキルアップコース

期 日	平成20年8月23日(土)～ 8月26日(火) 3泊4日
対 象 者	大学生、一般県民、公立学校教員(高等学校10年経験者研修として受講可) 県立南但馬自然学校登録指導補助員、 自然学校救急員
経 費	10,500円(全日程参加の場合)
申 込 方 法	「自然学校講座申込書」にて直接本校に申し込む。(FAX、Eメール可)
受 講 形 態	指導補助員養成コース (全日程参加を原則とする) 指導者スキルアップコース (1日単位の受講を原則とするが、 各講座ごとの受講も可)
研 修 内 容	23日 講義「兵庫県の自然学校と指導補助員の職務について」 自然体感ゲーム(自然観察) ナイトハイク(自然観察) 24日 講義「自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント」 キャンプファイヤーの基礎技術 25日 選択講座Ⅰ〔クラフト(基礎)・ 基地作り(応用)〕 救急救命講習〔心肺蘇生法 (AEDの講習を含む)〕 星空観察(自然観察) 26日 選択講座Ⅱ〔野外炊飯(基礎)・ 野外炊飯(応用)〕 講義「体験学習法」



実際には、無毒で性質も大変おとなしく、手にとっても咬みつくようなことはまずありませんので、携帯電話で記念撮影も簡単にできてしまいます。

◆本校ホームページ「自然のページ」より抜粋
<http://shizengakko.jp/>



しばらくお相手を願いたいものです。

一通り記録写真を撮ってから、キャンプ場を流れる佃川に放してやりました。オタマジャクシや小魚を好んで食べるヒバカリには水辺の景色がよく似合います。川辺にしばらくたたずむと、スマートな身体を滑らせ川上に姿を消して行きました。

今度、また出会えたならば、

この「ヒバカリ」というなんともへばらしくない名前の由来は、大変愉快なものです。その昔、ヒバカリは毒蛇だと考えられていました。それはそれは、とんでもない猛毒で、ヒバカリに咬まれると「その日ばかり(ヒバカリ)の命」だと信じられていたところから付いたようです。全く落語のような話ですね。

は大変難しいヘビです。私も過去にヒバカリの飼育に挑戦しましたが、結局、餌付けさせることができず断念した記憶があります。やっぱり野生種は自然の中で過ごすのが一番ですね。